

胚移植法の新しい試み

レディースクリニック北浜

貴志瑞季 今井和美 幸寺渚 北川晴香

上田鈴 中西裕子 金森真希 奥裕嗣

第58回日本生殖医学会学術講演会
利益相反状態の開示

筆頭演者氏名： 貴志 瑞季
所 属： レディースクリニック北浜

私の今回の演題に関連して、開示すべき利益相反状態はありません。

目的

胚移植法は、経腹超音波ガイド下での胚移植法が広く行われている。この方法は膀胱に尿を充満させる必要があり、患者に負担がかかる。また、プローブからの距離が遠い為明瞭な断層像が得られにくい。

我々は2012年10月よりプローブを腔内に挿入して行う経腔超音波ガイド下での胚移植法を導入した。この方法では、尿を充満させる必要がなく患者負担を軽減でき、超音波画像も鮮明であるというメリットがある。

本検討では凍結胚移植において胚移植法の違いが臨床成績に影響を及ぼすのか後方視的に比較検討した。

対象と方法

- ・ **対象**

凍結融解胚移植を行なった39歳以下の患者(204症例)

- ・ **期間** 2010年1月～2013年3月

- ・ **方法**

新法(A群86症例108周期)と従来法(B群142症例270周期)の平均年齢・ET回数・妊娠率・臨床的妊娠率を比較検討した。

新法と従来法

新法

(経膈超音波下での移植法)

- 超音波断層像

⇒ 明瞭

- 膀胱に尿をためる必要

なし

- 手技が容易

時間短縮

従来法

(経腹超音波下での移植法)

- 超音波断層像

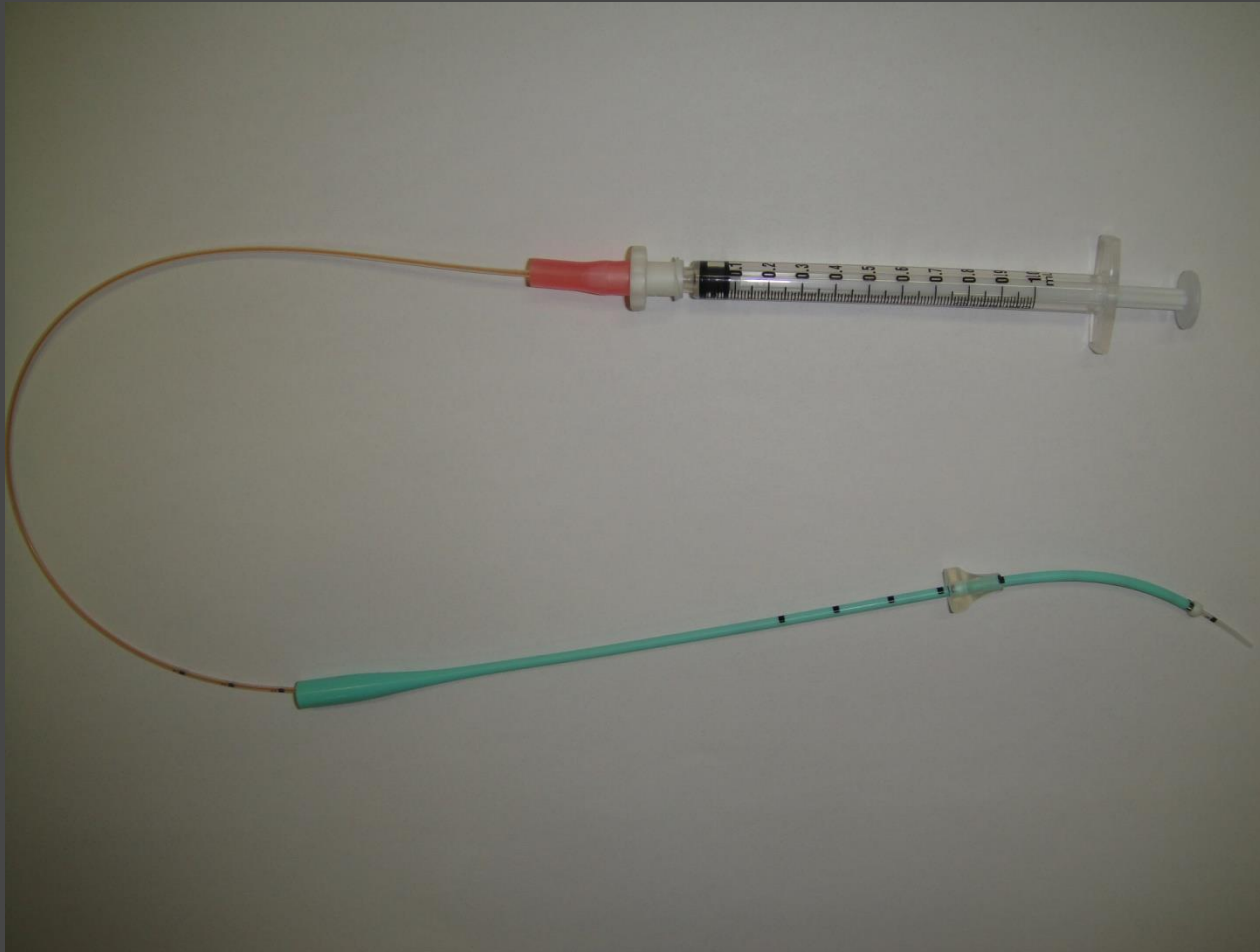
⇒ 不明瞭

- 膀胱に尿をためる必要

あり

患者の苦痛

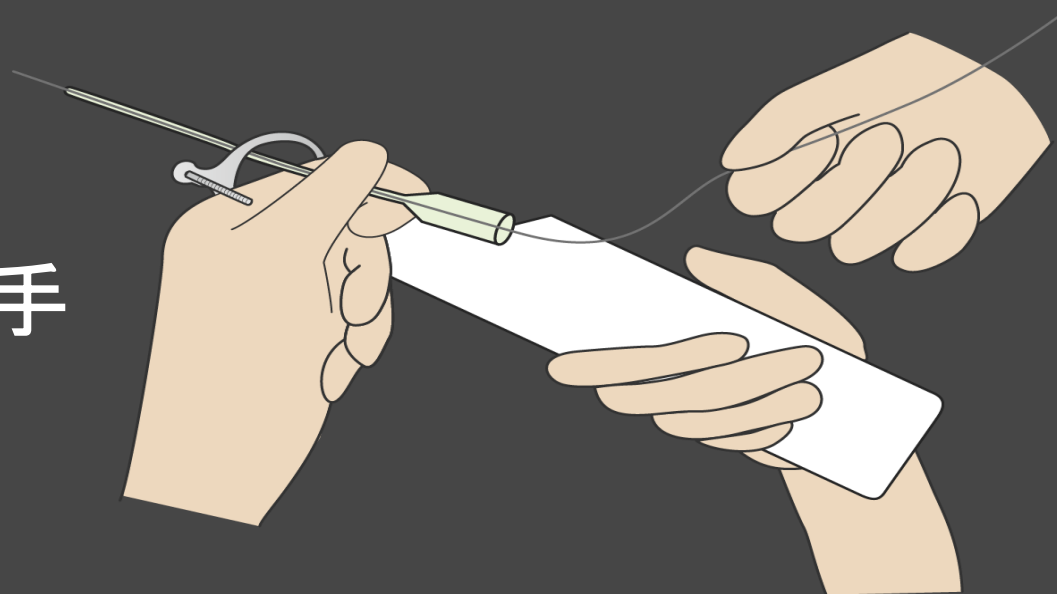
新しい胚移植法(カテーテル写真)



方法(図①:手の位置関係)

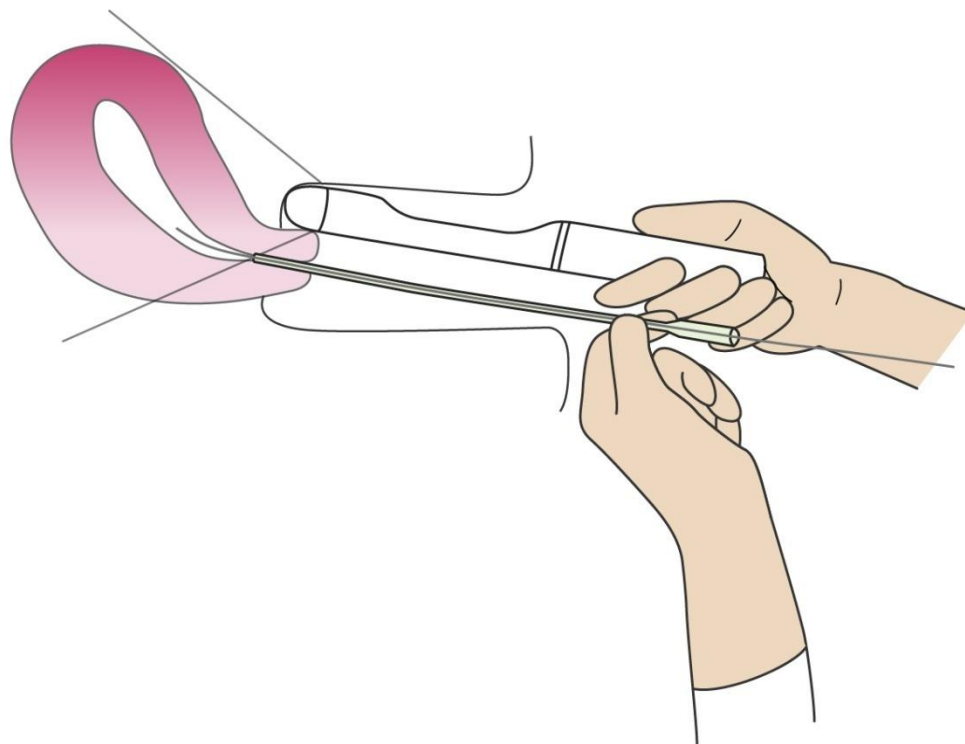
胚培養士の右手

医師の左手

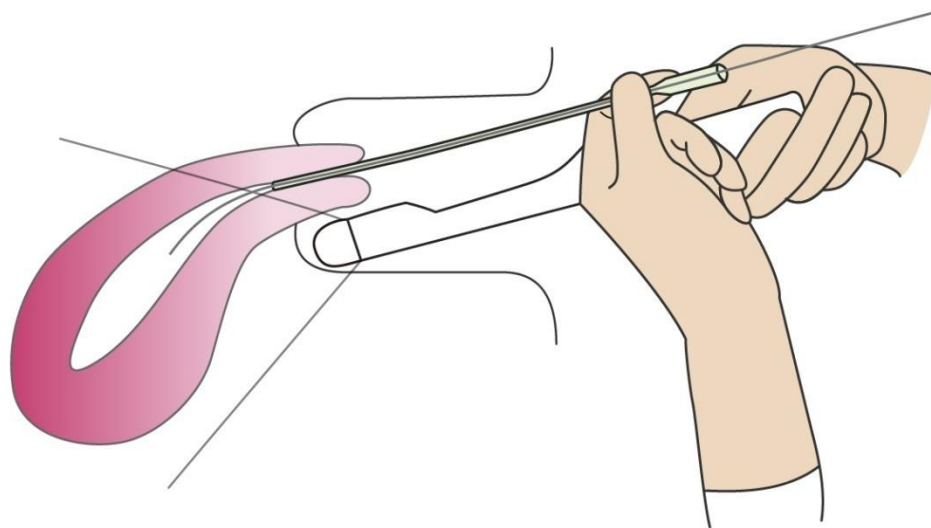


医師の右手

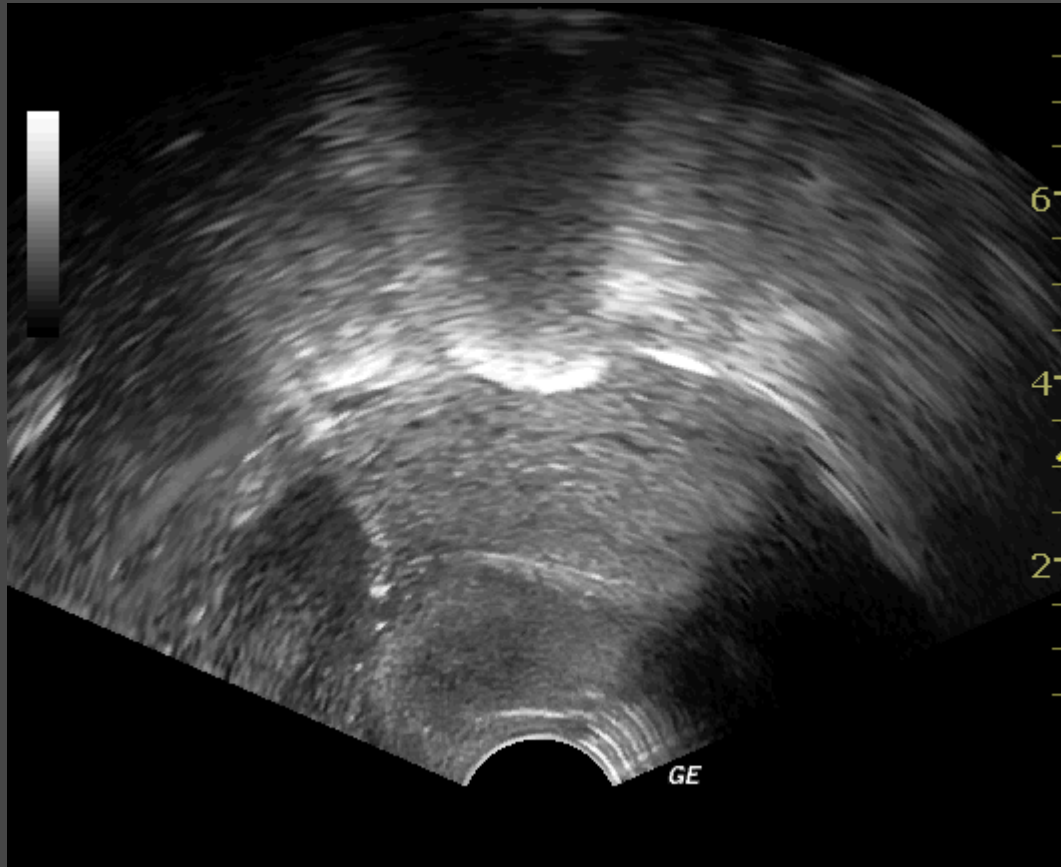
方法(図②:前屈の場合)



方法(図③:後屈の場合)



方法(エコー画像)

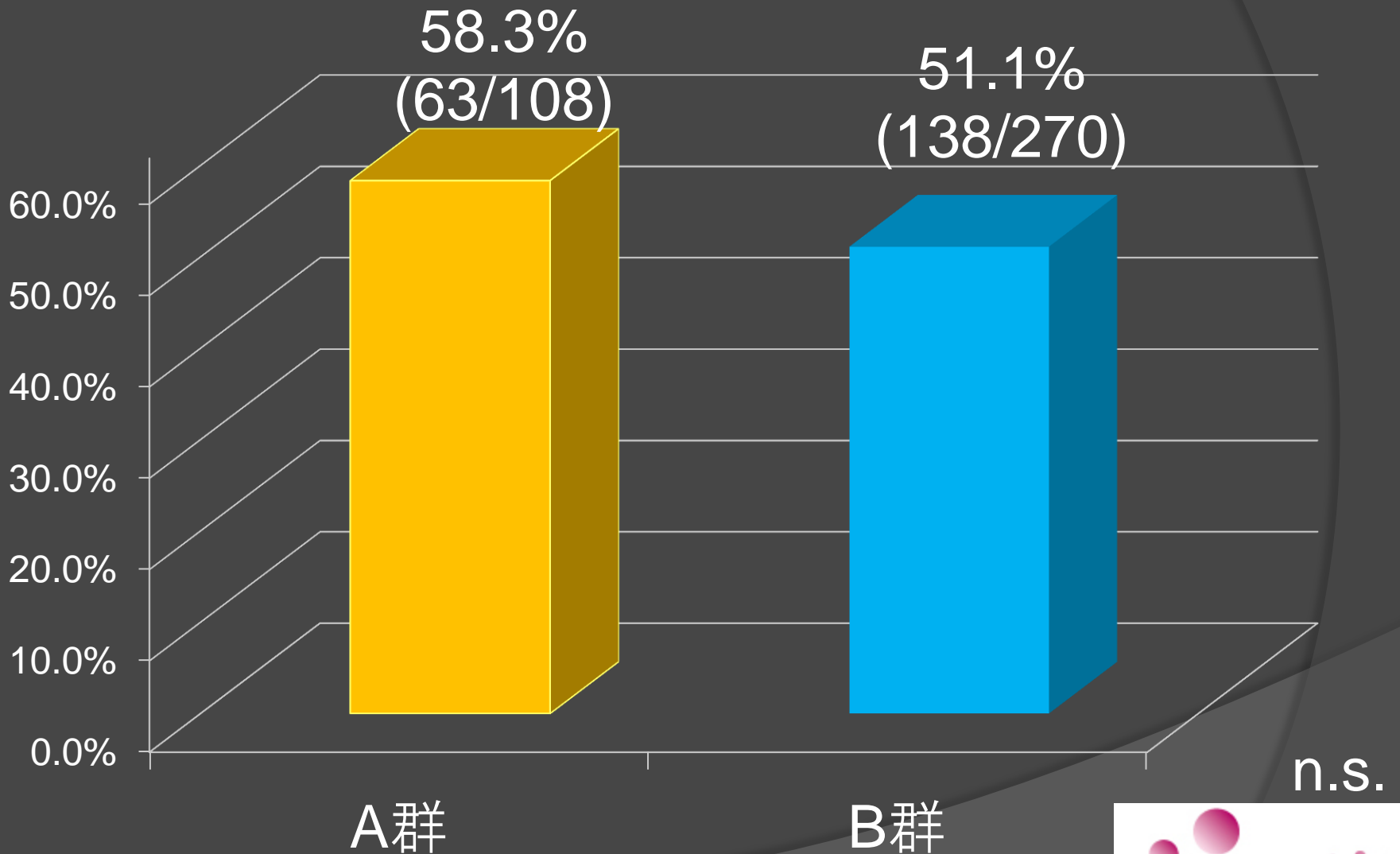


結果①

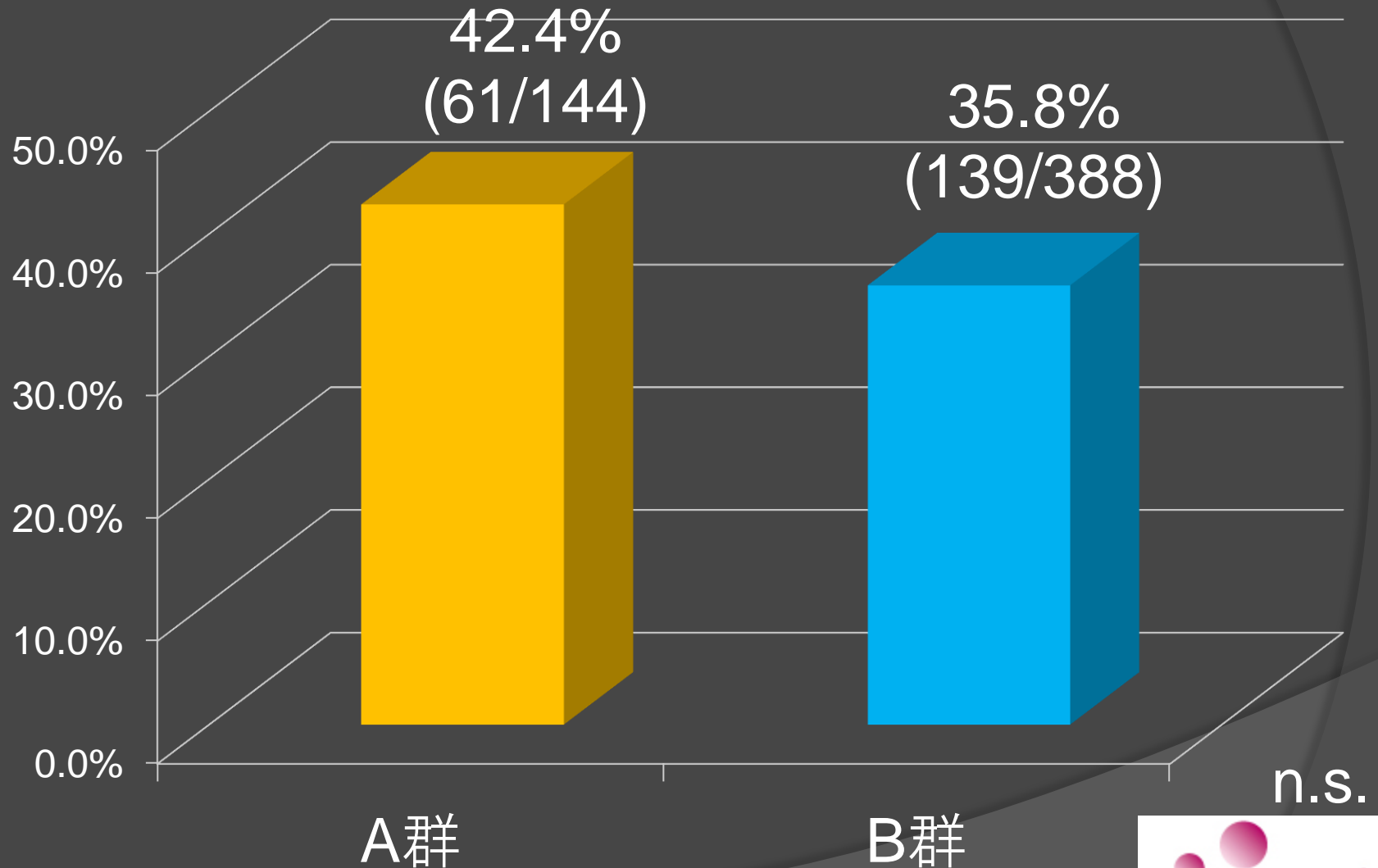
	平均年齢(歳)	ET回数(回)
A群	34.45	2.046
B群	34.85	2.048

n.s.

結果②(妊娠率)



結果③(臨床的妊娠率)



考察

- ◎ 新法は従来法に比べ、膀胱に尿をためる必要や、不鮮明な超音波画像などのデメリットがなく、胚移植の手技が容易なため、胚移植の時間短縮などのメリットが大きいと考えられる。
- ◎ 鮮明な画像により、至適な位置への胚移植が可能になり、妊娠率・臨床的妊娠率が上がったと示唆される。
- ◎ 今後、症例数を増やし、引き続き検討する。